

ドイツ医学採用(明治三年)前後 の別な事情(三)

原 口 忠 男

1 太政官公文書からの引用は「公」の符号で示す。2 引
用文中の省略部分は「……」の符号で示す。3 その文の趣
旨を Public Record Office (London) よりとった時は文尾
に (pro) の符号を付す。

(一) 東京医学校開設のこと

一八六九年一月廿五日三条左大将の旨をうけて外務輔東
久世中将から英国公使あて書簡があり、東京に西洋式病院
および医学校を創立したいがウイリス医師に協力させてほ
しことあり (pro) 医学校管理にこした William Willis M.D.
Edin. であつたが沢外務卿よりパークス英公使へ申し出が
ある。「公」[已十月廿五日英国公使館於テウイリス一条ニ
付同国公使へ沢外務卿對話書 ウキリス儀彌御暇相願度趣
……右趣意へ医学校一躰不規則ニテ事実不都合ノ事件多ク

何分難忍且御雇相成候上ハ局中百事差図致シ頭支配之姿ニ
相成候儀免テモ承允仕間敷候間同人儀ハ唯今御暇御差出之
事ト御治定有之度候」ウイリス鹹首の理由に頭支配の病院
管理をあげたが医学の問題ではない。間もなく辞表提出と
なる。「公」[二年十月廿九日医学校雇英国ウキリス乞暇ニ
付代教師雇入ヲ該国公使へ託ス」卿は公使に後任補充の要
を訴える。

(二) 英公使より東京医学校での後任推薦がない為当局の
とつた窮余の策は(1)独逸公使との間に英語で欧州医学を講
義するといふ条件付で独逸人医師二人を雇う契約を結ん
だ。「公」[一八七〇年二月一五日

独逸公使 ブラント Von Brandt

日本側 外務卿 沢宣嘉 連署

大学別当 松平慶永 外務大輔 寺島宗則

(2) 明治五年四月寺島宗則は大弁務使次いで特命全權公使
として英国に駐在し併せて海軍省の代理として明治六年医
師 W・アンデルソンと契約し、英国公使 (H・パークス) に予
報することなく (pro) 日本海軍病院に赴任させた。「公」[
明治八年同様の方法でマンニング医師を日本へ向け、着港

後直ちに東京府雇に契約を変更した。「公」

(三) 幕末明治初年に日本外科の受けた影響

他に比類のないのが米医 Samuel David Gross の著書

“A System of Surgery, Pathological Diagnostic, Therapeutic, and Operative” (1859) である。^③ すなわち島村鼎

甫の「創痍新説」石黒忠恵の「外科説約」および「外科通

術」田代基徳の「外科手術」および「切断要法」等の著者

に Gross からの引用が多い。^④ 日本でも米国外科学の人氣

が高かったようだ。また Gross の “Elements of Pathology

and Anatomy” (1839) と題する名著はウイルヒョウが嘆賞

した highly praised by Virchow とのこと。^⑤ 欧州でも世界

一流の外科医と評価されたグロスの言として当時米国に不

世出の四人の名外科医がいたと。^⑥ 米国外科で世界で卓越

していた分野は長骨および関節 (Long bones and joints) 銃

創の外科切石術 (lithotomy) および膀胱腔瘻 (Vesico-vaginal

fistula) の手術等であった。

(四) 岩佐・相良兩名に対する懲罰

二人の独逸人医師が明治四年八月来日してからの医学校

病院経営はもっと頭支配になったとか。ウイリスの辞意表

明時医学校事務取扱の職にあった兩名が同一時日(明治四年十一月五日)に同一事由(英和辞書購入)でしかも異なる勤務場所において罰せられている。

「公」四年十一月元大学権大丞相良知安外一人英和字書

買入方不正ニ付禁錮及贖罪 司法省……」

「公」司法省届……岩佐純其方儀大阪医学校御用途ニ相

成候英和辞書御買入ノ節……不筋ノ儀トモ不付右書籍代価

ノ余分……贖金四兩二分申付ル司法」兩名のうけた懲罰に

格差があるが相良の旧領主鍋島閑叟は明治四年早世し、岩

佐の旧領主松平慶永は明治廿三年まで生き旧家臣の面倒を

よく見た。

(五) 東京医学校の必須外国語の変転

(1) 「公」明治六年三月第一大学区医学校規則ヲ定ム

文部省布達予科ハ羅句学独乙学数学」

となり、必須外国語は英語より独乙語に変わる。更に一転

して

(2) 「公」……高等中学校医学部ノ学科及其程度ヲ定ム

文部省令 二十年九月十七日……第一条……学科ハ英語・

動物学・植物学……」

とあり、必須外国語は英語のみと再転した。

(3) 独逸語学の再興^⑦

是において大学は評議會を開き医科に至るまで皆英語を用いて教授することに一決した。ところが明治廿二年森有礼文部大臣が遭難し、榎本武揚氏その後任になってから前達を取り消す旨を高等中学校に達せられたので従来通りの外国語によって就学可能となった。

- ① 中野操 皇国医事大年表 一九八頁
- ② 原口忠男 日本医史学雑誌 二六卷三号 六三頁
- ③ 阿知波五郎 第六四回日本医史学会總會 特別講演(四)七③
- ④ 蒲原宏 整形外科 一三卷一二号 九四六頁
- ⑤ Ralph H. Major A History of Medicine p. 763
- ⑥ O.H. Wangenstein & S.D. Wangenstein The Rise of Surgery p. 578
- ⑦ 東京医事新誌 明治二十三年(上) 五七〇頁

私立医学校濟生学舎のこと

神谷 昭 典

私立医学校濟生学舎は、明治九年(一八七六)四月、長谷川泰が本郷元町一丁目の自宅に開いた医学私塾である(ただし外塾は水道橋)。長谷川は越後の人、佐倉順天堂に学び、維新後東京医学校に出仕し、佐藤尚中致仕のあとも尚中門最後の一人として五年九月東京医学校校長心得となった。

今般医学私塾を開き教員を設け解剖生理病理薬劑および内外諸科を教授せんとする有志の諸君は来る三月二十五日迄に御申込可有之

月謝一円東修一円五十銭

但し当分のところ寄宿生徒は二十五名を限り其余は通学

(開業廣告九年二月、郵便報知第九二号)

言うまでもなく、濟生学舎は明治期を通じて最大の私立